

創造の原点から

自然農法を考える

はじめに

昭和57年から、私が開発したEM（有用微生物群）の応用による自然農法のお手伝いをし始めてから30年余となりました。今では、化学肥料

や農薬を中心とする栽培法のレベルをはるかに上まわる事例が続出しています。愛知県の光輪農場は20ha余で畑作を行う自然農法の代表格ですが、北海道の新篠津村の早川さんの10haの大豆のようにEMを活用した大規模な自然農法が着実に広がっています。（写真1・2）

公益財団法人自然農法国際研究開発センター（自然農法センター）の有機JAS（日本有機農業認証）認定を受けた農家数や耕地面積は平成23年度でトップクラスとなりました。その成果は、他の有機農業認証

団体が伸び悩んだり、消滅している現実から考えると、極めて画期的なことであり、自然農法センターをこまで育て発展させた歴代の理事長と関係者の皆様の御尽力に、改めて敬意を表し、感謝申し上げます。

自然農法と私の縁や自然農法の理念については、昭和63年に、自民党の国会議員を対象に行った自然農法研修会の講演録である「創造の原点から農業を考える」に詳しく書いてあります。また事例集として平成4年に「救世自然農法とEM技術」が出版され、更には平成5年に発行された「天国の礎」社会・救世自然農法編（宗）世界救世教）の中に、岡田茂吉師（1882～1955）の創始した自然農法の捉え方について解説させていただきました。

今後の自然農法の研究開発や普及

に当たつての原点にすべきものであることは、改めて述べるまでもありません。（これらの資料については、自然農法センターに問い合わせください。）

当初、創始者の提唱する自然農法の論文を見せられた時に、その矛盾だらけに、あつけにとられてしまいました。原理主義的に捉えると、永久に論議を続けても必ずケチがつけられる内容になっており、一般の人々には、とても理解できるものではありませんでした。すなわち「理想が高く実現は不可能」であり、かつての自然農法は、この矛盾の壁に立ちすくんでいました。しかし、論文をくり返し読むと、妙に根柢なき自信に満ちあふれているのです。この自信は「自然即神」に立脚しており、肥料で作物を育てるという従来

比嘉 照夫

公立大学法人名城大学
国際EM技術研究所長
琉球大学名誉教授



（財）日本花の会評議員、農林水産省・国土交通省提唱「全国花のまちづくりコンクール」審査委員長、（公財）自然農法国際研究開発センター評議員
著書に「シントロピーの法則」（NPO 法人地球環境共生ネットワーク）、「新・地球を救う大変革」（サンマーク出版）など多数。

の農法の根本的な誤りを指摘し、この延長線上では、農作物は、人間の健康にとつて害毒となり、将来は食べる物がなくなると断言しているのです。しかも、その解決策は自然に学べということになっています。でも現実には、多少の例外はあっても、連戦連敗、その実態は、すべて論文に反するようなものばかりでした。

自然農法と有機農業の違い

一般的な言葉として考えると、両



写真 1

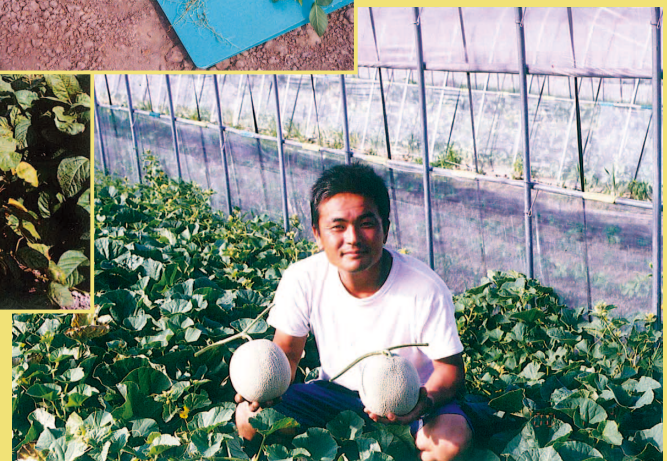
20ha 余の広大な面積で自然農法を営む農事組合法人光輪の圃場。全体が均一に育つようになる。(左)
開園当初は固くしまっていた頁岩が、今ではふんわりした土壌に変身。(下)



写真 2 北海道で自然農法（有機 J A S）を営む早川さんの大豆畑。(上)
15 年連作しているメロン（ルピアレッド）。客土をしなくても連作障害が発生していない。(右)



根張りが良く、根には根粒菌がたくさん付いている。鞘数が多く、実入りも良い。(左)



者は同じもので化学肥料や農薬の弊害をなくし、人々の健康と環境を守るという基本理念で一致しており、表現の違いと思われます。しかしながら、創始者の論文を読み込んでいくと、有機農業は自然農法の極一部であり、自然農法には救世の思想に裏付けられた明確なハードルがあります。そのハードルの第1番目が、

1. 人間の健康や環境にとって有害な資材を使わず、人間の健康を積極的に維持増進する食べ物を生産することです。概念的には有機農業も同じ立場にあります。自然農法は医食同源でなければなりません。自然農法センターの指導を受け EM を活用した自然農法農産物は、一般の有機農業農産物より、はるかに機能性が高く、健康にとって望ましい状態にあることは、医学的に様々な検証がなされています。有機農業では有機物の使い方によって体に悪い作物になる場合もあり、化学肥料や農薬の害を除いたという安心感レベルのものも少なくありません。ハードルの2番目は、

2. 生産者と消費者の双方に対し、経済的・精神的メリットがあること

です。このハードルを越えることは、従来の有機農業では極めて困難といわざるを得ません。精神的メリットとは、環境や健康を積極的に守っているという生産者の誇りと、健康や環境を守ってもらっているという消費者の感謝が連動しているということです。3番目のハードルは、

3. 誰にでも楽々実行でき、かつ永続性があることです。 食料を自分で作れるということは生きる力の基本であり、自然を知り、自己の向上を図り、病気になるない生き方を会得する最良の方法です。お金がかかる特別な機材や資材は不要で、素人にも、すぐ実行できなければなりません。自然農法は週休3日、4日の楽々天国農業となっており、そのレベルに達していなければ、未完の自然農法ということになります。続いて4番目のハードルです。

4. 自然を尊重し環境保全に責任を持つことです。 すなわち自然農法を実施することによって空気や水を常に浄化しつつ河川や海をきれいにし、生態系を豊にし、自然資源を増強し、生物の多様性を守るものでなければなりません。最後のハードルは、

5. 人口の増大に伴う食料生産に責任を持つことです。 地球の人口は70億を超え、100億になることも想定せねばならない時代となりました。自然農法の創始者は、自然を深く学び、その成果を実行することで、このハードルは乗り越えられると主張しているのです。この5項目のハードルは有機農業では部分的に可能であっても本質的な解決は不可能ということになります。

創造の原点は、 すべて自然界にある

岡田茂吉師の「自然即神」という哲学や宗教観は、人間の考えることは、すべて自然界にある、とする自然科学の究極の哲理に一致するものです。人類は様々な法則を自然界に見つけ、科学技術の発展に活用してきました。しかしながら、この活用の基準がお金であったり、戦争や権力に結びついた時に、自己矛盾をかかえたまま、すなわち、不完全技術のまま世に出てしまうと、いつの間にか必要悪になってしまいます。

農薬や化学肥料、膨大な医薬品の大半のものが必要悪的になってお

り、原子力発電所は、その最たるものです。汚染を放出する技術やコストのかかりすぎる技術は、創造の原点、すなわち、自然の教えに反するものです。現今、加熱しているIP S（人工多能性幹細胞）も生物学的観点からすればノーベル賞ですが病気の根本的な治療法としては、コストを含め難題だらけです。それよりも、自然農法農産物をベースに病気になるない生き方を徹底させることがはるかに得策であり、コストは不要といっても過言ではありません。

病気の大半は、生活習慣で自己責任に属するものが多く、難病の大半も、薬の飲み過ぎで起こっています。「薬をやめれば病気は治る」というキャッチフレーズは、今や一般的常識となり始めています。重要なことは、技術や社会のシステムを含め、自然の理にかなったチェックポイントを常に意識して対処することです。その要諦は、安全で快適、低コストで高品質で善循環的に持続可能であれば、本物であり、自然の理にかなっていることになります。なぜならば、自然は絶対に自己矛盾を生まず、低コストで高品質という原点をもっているからです。

創造の原点がすべて自然界にあるとすれば、自然に対する理解のレベルが、その創造性のレベルになります。岡田茂吉師の自然に対する理解は、自然力Xの存在を確信していることです。作物や畑に浄霊（霊気の放射）すると作物がよく生育するという事実に基づいて従来とは異なる自然力を感知し、未発見とことわった上で「このXによって一切万有は生成化育されるのであって、そのXこそ無にして有であり、万物の生命力の根源でもある」「従って農作物の生育といえども、この力によるものであるから、この力こそ無限の肥料である」「故にこれを認めて土を愛し、土を尊重してこそ、その性能は驚く程強化化されるので、これが真の農法であって、これ以外に農法はあり得ないのである。」

その結果、「土は肥料の塊のように機能し、連作すればするほど土は熟練工のように機能力を上げるため、連作すればする程、豊収になる」と述べています。その前提となるのが土の本質についての捉え方です。「その前に知っておかなければならないことは土本来の意義である。そもそも太初造物主が人間を作るや、



人間を養うに足るだけの食物を生産すべく造られたものが土である」

「そもそも自然農法の原理とは、土の偉力を発揮させることである。それは今日までの人間は、土の本質を知らなかった。否知らせられなかったのである。その観念が肥料を使用する事となり、何時しか肥料に頼らなければならぬようになってしまった。全く一種の迷信化したのである。」

極めつきは、「神は人間を生まれさせておきながら、その生命を繋ぐだけの食糧を与えない筈はない。もしその国が有する人口だけの食糧が穫れないとしたら、それは神が造ったところの自然の法則にどこか叶わないところがあるからである。」

自然をこのように達観し、自然の持つ本質的な力を引き出せる農法が究極の自然農法ということになります。

自然の本質とは何か

自然の本質とは、地球の生命の進化と宇宙の進化を支えている万有的な法則といえるものです。その法則は、「人間が望み、その条件を整え

ると、すべての願いが実現する力」といつても過言ではありません。前項で紹介した岡田茂吉師の自然観は、その域に達しており、要はどのように実現するかということに尽きます。

科学技術の飛躍的な発展で、生命進化の基本となるDNAの全容が解明され、DNA万能時代のような様相を呈していますが、メタゲノム解析等々の技術革新によって、培養できない微生物のDNAや、その機能性を明確にする方法が急速に進んでいます。それらの研究を通し明らかになったことは、人体には3〜4万種の微生物があり、その数は1000兆個以上ということ。人体の細胞は60兆といわれていますが、人体の細胞のほとんどに微生物があり、DNAの総量からすると、人間本来のDNAは、15%以下という説も有力となっています。

すなわち見方を変えようと人間も微生物の集合体であり、地球のいたるところに微生物が充満しており、地球のすべての存在に何らかの影響を与えており、すべての生物現象は微生物のあり方によって決まるということでも過言ではない状況になり始めて

います。また、あらゆるものに生命的反応があるとか、万物に生命が宿るという考えは、このような微生物の存在があつての話として理解されますが、最近では、人間の健康や精神状態や個々の性格も、微生物に支配されているという説も、かなり有力視されるようになってつづありま

す。この微生物達は、人間の感情にも反応し、様々な霊的不思議現象も微生物がらみであると主張する説も出ています。このような背景を考えると、自然の本質は、微生物と切り離して考えることは不可能という状況となっており、その前には、DNA万能説もかすんでしまいます。

土の偉力を発揮するためには

「そもそも自然農法の原理とは、土の偉力を発揮させることである。」

「そのためには、土を愛し、土を尊重し、土質の精力を強化することである。そうするにはまず土質を清浄、純粋化しなければならない。それは清浄なる土質ほど植物に対する生育力は旺盛だからである」

この見解は極めて重要で卓見で

す。すべての物質は、清浄、純粋化すると、その機能性が著しく向上することは、先端技術の常識であり、様々な材料革命の原点ともなっています。種々の機器の性能を高めるためには、構成材料の純度を高めるとともに、最も重要な部分には、酸化しにくい貴金属が使われています。

すなわち、汚れるということは、酸化が進んで劣化し、病害虫が多発することを意味します。化学肥料や農薬は、強烈な酸化剤であり、腐敗した有機物は、すべてのものを酸化する強い力を持っています。すなわち肥毒ということになります。長期的視野に立てば、炭や腐植のように炭素のレベルが高く、酸化物を徐々に還元する力のあるものは、土の酸化物（肥毒）を除去し、土を清浄化し、土の機能を高める力があります。要はどのような方法でもって土を浄化するかに尽きるのです。

結論的なことを言えば、完熟堆肥を長年施用し続けて、土の酸化物を取り除くのか、抗酸化物質を産生する有用な微生物の密度を高め、直に土の性能を高めるのかという方法論の違いだけです。すなわち、完熟した堆肥を使用し続けられれば、その場の

微生物相は、必然的に抗酸化的な微生物が増えており、結果的には同じ現象が起こっているということだと思います。

鉄の性能を高めるためには、高熱で酸化物を焼いて、強い力を加えて酸化物を追い出す作業が必要です。

しかも、熱源が炭であると、より効果的です。同じ焼肉でも、炭火で焼くとおいしくなるのは、炭の抗酸化機能によるものです。逆に石油やガスなどを使うと焼肉の酸化が進みやすくなり、時間が経つとまずさが加速します。すなわち、鉄の汚れの原因である酸化物を真空状態ですべて追出し純粋化すると、ついに鉄は、錆びなくなり、金なみの機能性を発揮するようになりますし、抗酸化レベルの高い食べ物、おいしくて体にいいということになります。

この浄化の原則は、生命体、非生命体にかかわらず、すべての物に共通し、万物の生成化育の根源ともいえるものです。自然界は蘇生と崩壊のバランスの上に成り立っています。が、蘇生を支えているのが抗酸化とエネルギー賦与現象で岡田茂吉師はそれを霊気と称しています。それに対し、崩壊の原因は、酸化とエネルギー

ギー放出現象ということになります。この自然の本質的な力を農業生産の中で、いかに発揮させ活用するかということが自然農法の発展の原則といえます。

自然農法でEMを活用する意義について

すでに述べたように、自然の姿の本質は、微生物に支配されていると言っても過言ではありません。見方を変えれば、地球の進化のプロセスは微生物進化の姿といえます。なぜならば、人間はもとより、地球上の生物は、すべて微生物の塊であり、空中、地中、水中（大気圏、地圏、水圏）のあらゆる場面に微生物が満ち満ち溢れているからです。微生物は、その機能を発揮するため、自然界のあらゆる条件に反応します。

すなわち、光（明暗）、温度、湿度（水分条件）、音、香等々のすべてのものに反応し、その勢力図（微生物相）が決まってしまうということです。・・・音楽を聞かせると良質の発酵食品ができるということから始まって、植物に、ほめ言葉や感謝の言葉をかけ続けると、生き生

きとなり、よく成長するとか、動物も同じ反応をすること等々も何となく体感し、理解できる人も増えていきます。

極めつけは、まずい料理に感謝をこめて、おいしくなってくれるように声をかけると、本当に体によく、おいしくなるという話やプラスチック容器に入れた食べ物に、いい言葉をかけつづけると発酵し、悪い言葉を投げつづけると腐敗するという話等々は、微生物が人の念（思い）や声の持つ波動（言霊）に反応した結果として理解することも可能といえます。

植物や動物に限らず機械や衣類、家具や家屋も、そのような思いで見たり、そのような思いで扱うと、同じように蘇生的に機能したり、崩壊的な状況になったりします。そのような現象も人間の念に各々に付着している微生物が様々に反応しているためと思われる事例も無数に存在しています。

様々な幸運が重なって、EMが世に出るようになりますが、EMは地球に存在する万物に対し、例外なく、蘇生的な力を賦与します。この機能は、すべてに共通し、使い続けてい

るうちに、徐々に浄化され、清浄となり純粋化の道をたどります。しかしながら一般の人々は、それを徹底せず、ある程度の効果が出た段階で、これくらい使ったんだから、もういいだろうとか、微生物が一定の効果を上げたので、もうやらないでも自然に増えるだろうと思って手抜きを始めます。

残念ながら、手抜きをすると、その時点から逆方向に進みます。なぜならば、今の地球は、かつての地球と異なり、酸素の量がかなり多くなっており、動植物のエネルギー代謝は、その酸素の量に適應するようになっているからです。特に酸素消費量の多い動物は、そのエネルギー代謝のプロセスで、必ず、活性酸素が出るようになっていきます。その活性酸素とは、DNAの機能も破壊する力をもっており、病気や老化の大きな原因となります。

その活性酸素の量はエネルギー代謝に関与する微生物の様態で決まり、腸内の善玉菌が増えれば健康になり、悪玉菌が増えれば病気になるというのは常識化し始めています。特に糞尿などの腐敗性の有機物は悪玉菌を加速的に増やす強烈な力を



持っています。この原則は、空気、水、土はもとよりすべての農・工業分野、衣類、居住環境、家具、器材等々あらゆるものに当てはまります。

したがってEMを空気や水の如く使うEM生活に徹し、生活環境を高レベルの善玉菌化することによって、万病の予防が可能となります。また省エネで物を大事に機能よく、長期にわたって使い続けることができるようになり、低コストで高品質の人生の基礎を作ることにも役立っています。

このように、たゆまない自然の微生物の営みを徹底して活性化し、土中に蘇生型の微生物の大ジャングルができる、地上には限界突破の作物が育つようになり、土壌の機能も年々向上するようになります。

考えてみると、農業という行為は自然を破壊することであり立っています。森林や原野を破壊することから始まって、耕起による土壌生態系の破壊、大雨による表土の流出、化学肥料や農薬の使用による環境汚染と生態系への致命的な影響は、環境破壊と人間の健康に対し、赤信号を発しています。有機農業の再認識は、このような危機的状況の打解の

ために強調されていますが、化学肥料や農薬をやめても、堆肥を作り、機械で耕すという方法をつづける限り、自然破壊のスタイルに変わりはありません。したがって、この形式の中に、自然の力を取り入れようと思っても限度があり、せいぜい有機農業止まりになってしまいます。したがって「農業の中に自然の力を取り入れる」のではなく「田畑の自然力を強化し、農業を取り入れる」という考えに徹さない限り、岡田茂吉師の提唱する自然農法は永遠に実現することは不可能ということになります。

T P Pを含め農業における本質的な問題の解決は、自然農法を軸にする以外に選択肢はありません。このような時期に当たって、創造の原点から自然農法を考えることは、今後の更なる躍進に大きな力となるものです。

写真3 サンシャインファーム
(株) E M研究機構のモデル農場
(10,000 m²)

ホテルコスタビスタ (EMホテル) から出る生ごみすべてを (1日 300 ~ 400kg) デスポーザーで粉碎し、EM活性液を加え有機液肥にして施用。その他、泡盛製造廃液にEMを添加し液肥として施用したり、チップ状になった種々の有機残渣と混用する方式をとっている。

不耕起連続栽培の自然農法の究極のモデルになりつつある。



写真4 植物のための青空宮殿
(1,500 m²)

畑の自然力を徹底して高め、不耕起連続栽培を行っているため収量や労働効率は一般の3 ~ 5倍。

展庄された駐車場跡地に不耕起で植穴の石を取り除いて定植し、EMとEM鶏糞を施用して不耕起栽培しているリーフレタス (左) とインゲン (右) (土の厚さは3 ~ 4 cm)